

白雲片片

第二十二回

寂円禅師

じやくえんぜん じ

寂円禅師は福井県大野市にある薦福山せんぷくざん

ほうきやうじ

宝慶寺の開山である。宝慶寺は永平寺から南東へ車で一時間ほどの標高五百メートルの山中にあり、開創は弘長元年（一二六一年）、道元禅師示寂の八年後になる。

道元禅師の門弟は多数いたことが分かっているが、寂円禅師もそのうちの一人である。京都深草ふかくさの興聖寺から永平寺に至る

までを通じて道元禅師の会下えかでは特に日本達磨宗ほんだるましゆうより参じてきた人たちの存在が目立つ。敬称を略してその名を列記すると、懐奘えじよう、義介ぎかい、義演ぎえん、義尹ぎいん、懐鑑えかん、義準ぎじゆん、懐義尼えぎに、懐照えしやう、義信ぎしんといった面々である。

また、日本達磨宗とは関連がないと思われる詮慧せんね、僧海そうかい、了然尼りやうねんに、法明ほうみやう、慧運えうん、覚かく、仏ぶつ、顕慧けんね、行玄ぎやうげん、慧顛えぎ、普灯ふとう、巢雲そううん、慧達えだつ、寂光じやくこう、仏聡ぶつそう、道荐どうせん、慧信尼えしんにも確認できる。そして出家在家、宗派を問わず、他にも多数の人物が入門の形はとらずとも道元禅師のもとを訪れていたようである。

道元禅師に参じた多くの門弟の中でも寂円禅師は異彩を放っている。従来の説に準ずると出身は宋国であり、幼年で天童山景德寺に上つて得度を受けた。その後、天

童山に入山した如浄禅師の膝下で具足戒を受けたとされる。峻烈な家風を宋国に轟かせた如浄禅師に直接参禅した人物は、道元禅師の会下に道元禅師自身と寂円禅師の二人しかいなかっただろう。

寂円禅師の伝記で最も古いものは永平寺十三世、宝慶寺十四世の建綱禅師けんこうが著した『宝慶由緒記』である。これは寂円禅師が示寂してから百五十年以上経った後の編集であり、原本は伝わらず書写が重ねられてはいるが、宝慶寺に伝来した大変貴重な文書であり、後世の寂円禅師に関する著述のほぼ全てがこの由緒記に基づいているようである。

私は何年か前から寂円禅師に関する資料をいくつも見ることがあったので要約してここに紹介する。

永平寺が後円融天皇より「日本曹洞第一道場」の勅額を賜ったのはよく知られているが、宝慶寺の山門には永平寺六十一世久我環溪こがかんけい禅師染筆の「日本曹洞第二道場」の額が掲げられている。永平寺には四門首しもんしゅと呼ばれる末寺の代表寺院が四ヶ寺あり、寺院名と開山禅師をそれぞれ列記する。

薦福山宝慶寺（福井県・寂円禅師）

東香山大乗寺（石川県・義介禅師）

大梁山大慈寺（熊本県・義尹禅師）

仏徳山興聖寺（京都府・道元禅師）

なぜ宝慶寺が筆頭門首なのかということ
は推測するしかないが、恐らく永平寺の歴史が関係している。

道元禅師示寂後に起こったいわゆる三代相論だいそうろんや罹災りさいによって衰退の一途を辿っていた永平寺を復興したのは寂円禅師唯

一の法嗣はつす、五世中興義雲ぎうん禅師である。義雲

禅師は寂円禅師に二十年以上随侍し、師の

示寂後に宝慶寺二世として住していたが、

永平寺四世義演禅師の示寂後に永平寺大

檀那である波多野氏はたのから晋住の懇請を受

け、宝慶寺を法嗣ほんきの曇希どんき禅師（永平寺六世）

に託して永平寺へ五世として入山し、散逸

してしまっていた正法眼蔵を収集して六

十巻本正法眼蔵をまとめるなど、後世に残

した功績は計り知れない。しかも、義雲禅

師が永平寺に晋住して後、三十七世石牛せきぎゆう

天梁てんりょう禅師に至るまで、三百五十年以上も

の間、永平寺の世代は寂円禅師の法系によ

って護持されてきた（永平寺へ晋住するた

めに法系を変えた場合も含む）。宝慶寺が

永平寺の筆頭門首である理由はこのあた

りが関係しているのではないだろうか。

嘉定十七年（一二二四年）、如浄禅師が

天童山じゆいんに入院し、その噂を聞いて参禅した

道元禅師は、天童山で寂円禅師と出会った

ようである。寂円禅師は道元禅師に感銘を

受けて以降、敬慕するようになり、師弟の

契りまで交わしたといわれる。天童山にお

いて二人は共に坐禅弁道した同門の間柄

であった。出会ったのは道元禅師二十五歳

頃、寂円禅師十八歳頃と思われる。

道元禅師が如浄禅師より伝戒・嗣法を許

され、辞して帰朝する際には、寂円禅師は

港まで道元禅師を見送りに向いた。そこ

で共に船に乗り、日本へ渡航することを希

望した。しかし道元禅師から師の遷化まで

は随侍することを托されたため、日本での

再会を約束し、一度景德寺へ戻った。それ

から間もなく如浄禅師は遷化しており、寂

円禪師は安貞二年（一二二八年・一説に安貞元年）に来朝し、道元禪師を京都の建仁寺に訪ねたとされている。この説に従えば、懐奘禪師は興聖寺時代（文暦元年・一二三四年）に入門したとされているから、それよりも随分早く道元禪師最初の門弟となつたことになる。しかし、懐奘禪師が最初に道元禪師を訪ねた時には建仁寺において仮寓かぐうの身であることを理由に入門を断つているため、恐らく実際には寂円禪師の入門も建仁寺時代よりは後だと思われる。入門後は道元禪師の移錫に従つて常に随侍し、興聖寺から吉峰寺、永平寺へと移り、道元禪師示寂後もしばらく永平寺に残つた。

現在、永平寺では承陽殿にて道元禪師、懐奘禪師、義介禪師、義演禪師、義雲禪師

の五大尊と瑩山禪師の尊像が安置してあるが、古くは承陽庵と称し、道元禪師が如浄禪師の靈廟れいびょうとして建立し、その塔主たっす（侍真）に寂円禪師が任命されたとする記録がある。帰朝した後の道元禪師にとつてみれば、寂円禪師は自分以外に生前の如浄禪師を直接知る唯一の人物であるから何ら不思議なことではない。しかし、道元禪師の会下にあつた日の寂円禪師の動向については他の記録が全く見当たらない。

『正法眼蔵随聞記』の最初に「ある日、道元禪師は如浄禪師から侍者を勤めてもraitたいと頼まれた。しかし道元禪師は、それは修行のために重要なことではあるけれども、自分は異国の出身なので私が侍者を勤めたのでは大宋国の体裁ていさいに関わる、と言つて断つた」という記述がある。当時、

天童山にいたであろう寂円禪師がこの話を知つていた可能性は十分にあると思う。憶測でしかないが、道元禪師が日本において仏法を開演するにあたり、異国の出身である寂円禪師は道元禪師を慕つてはいたものの、何かと遠慮しては他の人物に譲つていたのでないだろうか。常に会下にいたであろう寂円禪師に関してこれほど記録が少ないのは不自然に感じられる。恐らく配役としては興聖寺と永平寺にそれぞれあつたと伝えられる承陽庵の塔主を徹底して勤められたのではないだろうか。

道元禪師の示寂後、寂円禪師は懐奘禪師より嗣法した後に永平寺を去り、一人山深い銀椀峯げなんぼ（銀杏峰）に入り込んだ。そこで石上に坐すこと十八年、一度も下山をしなかつたと伝えられている。故郷の師である

如浄禅師と、来朝の縁を結んだ道元禅師はすでに遷化し、異国の地で永平寺の衰退を目の当たりにした寂円禅師の心境はどのようなものであっただろうか。

ある日、銀椀峯の石上で悠然と坐禅をしていたところ、鷹狩りに来ていた地方の豪族、伊自良左衛門尉知俊親子と出会い、篤い帰依を受けて宝慶寺を開創し、数年後には天童山に倣った七堂伽藍を兼備するに至った。その後、奇しくも永平寺の復興は法嗣の義雲禅師の手によって成されることになる。

因みに興味深いことに、義介禅師が永平寺三世として住持していた頃、すでに門弟となっていた瑩山禅師（十九歳頃）は、義介禅師の勧めで宗円禅師や懐暉禅師とともに、銀椀峯にて枯淡な生活を続けていた

寂円禅師を訪ねて参禅している。それも二回に分けてである。しかも瑩山禅師は『洞谷記』の中で寂円禅師のことを「本師宝慶円和尚」と、「本師」という尊称を用いて呼んでいる。これは極めて異例のことではないだろうか。当然、瑩山禅師は義介禅師の法嗣であるはずだから法系上の意味で用いているわけではないだろうが、瑩山禅師と寂円禅師の間には特別な何かがあったと思われる。ここでは詳しく述べないが、瑩山禅師には如浄禅師を強く慕う傾向があるとの指摘もあり、寂円禅師からの影響があつた可能性が大いに考えられる。

義雲禅師の弟子たちがまとめた『義雲和尚語録』仏祖賛の中で、義雲禅師が師の寂円禅師を評した箇所がある。

「全相の妙、通身の照、洞山頂上の眼

晴を奪いて、吉祥堂奥の心要に透徹す。塵塵三味の座床に據り、刹刹常説の曲調を暢ぶ。拈柄を拈弄して殃兒孫に及ぶ。雲を打し、水を打つ、好一場の笑。」

正安元年（一二九九年）九月十三日、床に臥した寂円禅師は義雲禅師を呼んで後事を託し、「私は大宋国に帰る」と言い残して遷化した。世寿九十三、故郷の宋国を発つてから七十一年が経過していた。

参考文献／曹洞宗宗学研究所編『道元思想のあゆみ1』、大久保道舟編『道元禅師全集』『道元禅師傳の研究』、孤峰智璨編『常濟大師全集』、水野弥穂子訳『正法眼蔵隨聞記』、宝慶寺発行『修行の寺寶慶寺』、石川力山著『宝慶由緒記の史料的价值』、東隆眞著『寂圓の家風とその特色』